

# 合戦場面の常套句 「くもで」「かくなわ」

## 「十文字」「とんぼ返り」「水車」について

——『平家物語』を中心に——

大下和歌子

### 序論

軍記物語の合戦場面には、それぞれ特有の表現がある。常套句「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」は、そうした表現の一つであり、『平家物語』の巻四「橋合戦」に見られる（語り系諸本の一つの完成形と考えられる寛一本に見られるが、比較的古態を存するとされる百二十句本には存在しない。また、延慶本・長門本・源平盛衰記といった読み本系諸本にもない。【注一】）ことが、早くから、渥美かをる氏の『平家物語の基礎的研究』（笠間書院 一九七八年 二五一―二五二頁）により指摘されている。

常套句のその独特な合戦表現は、大変印象的で、私が、常套句「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」を研究しようと思った理由は、そうした『平家物語』の巻四「橋合戦」における表現にある。

かたきは大勢なり、くもで・かくなわは・十文字・と（シ）  
ばうかへり・水車、八方すかさずき（ツ）たりけり。【注  
2】  
（巻四・橋合戦）

つまり、これらの表現が動機となって、『平家物語』の表現に影響を受けた作品はもっと他に存在するのではと考え、調べていくうちに、この常套句を歴史的に研究するようになったわけである。

『日本国語大辞典』（小学館）によれば、「くもで」「かくな

「わ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」には、次のような説明と用例がある。

(1) くもで〔蜘蛛手〕

四方八方に駆け回ること。また、刀や棒などを打ち違えに振り回す動作。

「我命の続かんだけかたはし撫切(なでぎり) 押打(をがみうち)、くもで、輪違、十文字、十方八方打ち立て追立まくり」  
(浄瑠璃・平仮名盛衰記)

(2) かくなわ〔結果〕

「かくのあわ」が縦横に交差しているように) 太刀などを縦横に振り回して使うさま。

「くもでかくなは十もんじ、わりたてをんまはし」

(浄瑠璃・傾城反魂香 上)

(3) じゅうもんじ〔十文字〕

①前後左右に動き回ること。また、ばらばらに乱れるさま。

「たてさま横さま十文字に、敵をさつとけちらして」

(平治物語 中 待賢門の軍のこと)

②太刀の使い方の一つ。十の字の形に太刀を使うことか。

「太刀をぬいてたたかふに、かたきは大勢なり、くもで・

かくなは・十文字(じふモンジ 高良本ルビ)、とんぼう

かへり・水車・八方すかさずきつたりけり」

(平家物語 四 橋合戦)

(4) とんぼがえり〔蜻蛉返・筋斗返〕

剣術の刀法の一つ。誘い太刀を打ってすばやく後に引き、相手がつけ込んで打ち掛けるとき、とび違つて刀を返しざまにこれを斬る方法。とんぼうがえり。とぼうがえり。

「敵付込み打時に、飛違へて身のかねを以て打也、又蜻蛉がへりと云ふなり」  
(撃劍叢談 三 本流新流)

(5) みずぐるま〔水車〕

武器を激しく振り回すさま。

「二段ばかり隔てて水車(ミツグルマ)を廻し、次第々々に責寄て」  
(源平盛衰記 二二 衣笠合戦)

また、「日葡辞書」にも「十文字」として、次のような用例が挙げられている。

jumonji ジュウモンジ〔十文字〕

「Tate, yoco jumonjini tegino cage yaburu.」(縦横十

文字に敵を駆け破る)

《訳》四方八方へ敵をうち破る。【注3】

これらの語は、「寛一本平家物語」の巻四「橋合戦」で取り上げられ、「かたきは大勢なり、くもで、かくなは、十文字、

とんばうかへり、水くるま、八方すかさずきつたりけり」とい  
う合戦描写の常套句としてよく指摘される。しかし、そこには、  
未だ一語一語についての具体的な言及はなされない。

このように、改めて、「くもで」「かくなわ」「十文字」「とん  
ば返り」「水車」を二語一語見ることで、それぞれの語の持つ  
意味には、「技の凄み」が現われる。

合戦場面の常套句（形容）として定型化され、つい抽象的に  
見られがちな語句は、具体的に一語一語とらえることで、合戦  
場面における一つの「技表現」として位置する。そうした「技  
表現」「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんば返り」「水車」  
は、合戦での激しい戦いぶり「技の凄み」を更に容易に想像さ  
せるに違いない。

宮倉徳次郎氏は、『平家物語全注釈』上巻（角川書店 一六  
六七年 六一四頁）の巻四「橋合戦」に見られる「くもで」  
「かくなわ」「十文字」「とんば返り」「水車」について、「これ  
らのことは、ただ形容という以上に、事実太刀の振り方のこ  
とばとして用いられたもの」と語釈されている。

ここで、前掲「かくなわ」の中で触れた「かくのあわ」の説  
明を、古記録を用いて述べることにしよう。平安中期の漢和辞  
書『倭名類聚抄』の巻一六「飲食部第二四・飯餅類二〇八」に

よると、

結果 楊子漢語抄云 結果 形如結緒此間亦有之今案和名

加久乃阿和【注4】

とある。また、平安後期の有職故実書『江家次第』には、次の  
ように記録されている。

其菓子ニ、加久繩一坏 （巻二「七日節會装束」五五頁）

其菓子加久繩一坏 （巻一〇「新嘗祭」三〇七頁）

【注5】

つまり、本来「かくなわ」は、平安時代にあつたお菓子の名  
称で、「粉をこねて緒を結んだような形をつくり、油で揚げた  
菓子【注6】」というわけである。言葉の由来は様々だが、合  
戦表現としての語「かくなわ」の意外な一面を知った。

このように、一つの語に限って意味の研究を進めるのも、大  
変興味深い。しかし、ここでは、語彙史的研究を進めていき  
たいと考える。

私は、まず、合戦場面の一つの常套句として、また、一語一  
語に分解し、更に戦い方を明確にした一つの「技表現」として  
用いられる「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんば返り」「水  
車」を、表現形式も考慮に入れながら、歴史的に究明してみよ  
うと思う。ここでは、『平家物語』の常套句が、他の作品の表

現にどのような影響を与えたのか、また、それぞれの語の発生時期を考え、常套句が、どの時代に頻出するものなのかを語彙史的に考察していきたい。

なお、取り上げる作品としては、私が常套句「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」を研究するきっかけを作った『平家物語』覚一本、更に、屋代本、百二十句本、平松家本、覚一別本、葉子十行本、下村時房刊本、流布本、平家正節、八坂本、源平闘諍録、四部合戦状本、延慶本、長門本、源平盛衰記の全部で十五本を中心に考える。また、『平家物語』と同じジャンルに属する軍記物語や、特に『平家物語』の表現に影響を受けたと思われる作品、例えば、謡曲、幸若舞曲、浄瑠璃、御伽草子なども、出来る限り広く選んだ。

注1 加美宏「合戦記と合戦譚」(国文学解釈と鑑賞第32巻 一九八七年二月)

注2 日本古典文学大系『平家物語』上(岩波書店 一九五九年) 三一〇頁

注3 土井忠生・森田武・長南実編訳「邦訳日葡辞書」(岩波書店 一九八〇年)

注4 正宗敦夫編「倭名類聚鈔」自一一卷至二〇卷(風間書房 一九五四年)

注5 増訂故實叢書『江家次第』(吉川弘文館・日用書房 一九

二九年)

注6 『日本国語大辞典』第四卷(小学館 一九七三年)「かくなわ」のあわ

## 第一章

『平家物語』には、多くの諸本が存在し、それぞれ独自の、意図や目的を持って編集されている。ここでは、その『平家物語』の諸本、十五本を使用し、諸本ごとに、合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」の用例すべてを挙げてみる。

### (1) 『屋代本』

第四・九欠巻であり、合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」は見られない。

### (2) 『百二十句本』

木そ三百よきにて、たてざまよござま、くもで十もんじにかけやぶり、六千よきがあなたへかけいでたれば、

(巻九「かねひら」四三三頁)

### (3) 『平松家本』

① 長刀 戦 従来究竟、上手也蜘蛛手角繩十文字蜻蜒還水

車八方不ムナカ透ツラ剪ツ

(卷四「宇治橋平等院合戦之事」三四一頁)

② 我、思、人、人、寄合、見參為、大勢、中、立様横様蜘蛛手十文字懸廻、戦。

(卷八「法住寺殿合戦之事」六四四頁)

③ 木曾三百余騎、六千余騎、中、堅様横様蜘蛛手十文字懸破、後、通、出、

(卷九「義仲討死之事」六七七頁)

④ 梶原我身、上、不、知源太、何、有、數萬騎、大勢、中、堅様横様蜘蛛手十文字、懸破廻、程。

(卷九「二谷合戦之事」七二五頁)

(4) 『寛一本』

① その後太刀をぬいてたゝかふに、かたきは大勢なり、くもで、かくなは、十文字、と(シ)ばうかへり、水車、八方すかさずき(ツ)たりけり。

(卷四「橋合戦」上三二〇頁)

② 我とおもはむ人々はよりあへや、見參せん」とて、堅様、横様、くも手、十文字に懸わり懸まはり戦ひけるが、

(卷八「法住寺合戦」下一五八頁)

③ 木曾三百餘騎、六千餘騎が中をたてさま・よこさま・蜘蛛手・十文字にかけわ(ツ)て、うしろへつ(ツ)といひてた

れば、

(卷九「木曾最期」下一七八頁)

④ 梶原まづわが身のうへをばしらずして、「源太はいづくにあるやらん」とて、數万騎の大勢のなかを、たてさま・よこさま・蜘蛛手・十文字にかけわりかけまはりたづぬるほどに、

(卷九「二度之懸」下二〇九頁)

(5) 『寛一別本』

① その後太刀をぬいて、たたかふに、かたきは大勢なり、くもで、かくなは、十文字、と(シ)ばうかへり、水車、八方すかさずきツたりけり。

(卷四「橋合戦」一三三四頁)

② 我と思はん人々は寄りあへや、見參せん」とて、堅様、横様、くも手、十文字に懸けわり懸けまはり戦ひけるが、

(卷八「法住寺合戦」二一六九頁)

③ 木曾三百余騎、六千余騎が中をたてさま、よこさま、蜘蛛手、十文字にかけわつて、うしろへつと出でたれば、

(卷九「木曾最期」二一九五頁)

④ 梶原まづ我身のうへをば知らずして源太はいづくにあるやらんとて、數万騎の大勢のなかを、たてさま、よこさま、蜘蛛手、十文字にかけわりかけまはりたづぬる程に、

(卷九「二度之懸」二二三三頁)

(6) 『燕子十行本』

① 其の後太刀を抜いて、戦ふに、敵は大勢なり、蜘蛛手・かくなは・十文字・とんぼうかへり、水車八方すかさず切つたりけり。  
(卷四「橋合戦」上二九二頁)

② 敵の中へ分つて入り、縦様・横様・蜘蛛手・十文字に散散に闘ひ、傷手數多負ひ、(卷八「妹尾最後」中一四二頁)

③ 我と思はむ人人は寄り合へや、見參せん」とて、縦様・横様・蜘蛛手・十文字に散散に戦ひ、傷手數多負ひ、

④ 木曾三百餘騎、六千餘騎が中へ懸け入り、縦様・横様・蜘蛛手・十文字に懸け破つて、後へつと出でたれば、  
(卷八「法住寺合戦」中一五二頁)

⑤ 梶原先づ我が身の上をば知らず、源太は何くにあるやらんと、たてさまよこさま蜘蛛手十文字にかけわりかけわり尋ぬる處に、  
(卷九「二度懸」中二〇三頁)

(7) 「下村時房刊本」  
① 其後太刀をぬいてたたかふに、敵は大勢也、蜘蛛で、かくなは、十文字、とんぼうかへり、水車、八方すかさず切たりけり。  
(卷四「橋合戦」上二八九頁)

② 敵の中へ懸入、堅様・横様・蜘蛛手、十文字、散散に戦ひ、痛手餘多おひ  
(卷八「瀨尾最後」下七五頁)

③ 我と思はん人人は寄合へや、見參せん」とて、縦さま、横さま、蜘蛛手、十文字に懸(懸)わり、かけまはり、戦ひけるが、  
(卷八「法住寺合戦」下八三頁)

④ 木曾三百餘騎、六千餘騎が中へ懸(懸)入、堅様、横様、蜘蛛手、十文字に懸(懸)破て後へつと出たれば、  
(卷九「木曾最後」下一〇〇頁)

⑤ 梶原五百餘騎の大勢の中へ懸(懸)入、堅様、横様、蜘蛛手、十文字にかけ破つて、さつと引て出たれば、  
(卷九「二度懸」下一二三頁)

(8) 「流布本」  
① 其(の)後太刀を抜(い)て戦ふに、敵は大勢なり、蜘蛛手・かく細・十文字・蜻蜒返り、水車、八方不・透切(つ)たりけり。  
(卷四「橋合戦」二七〇頁)

② 敵の中へ懸入(り)、堅様横様・蜘蛛手、十文字に懸廻り、散々に戦ひ、敵あまた討取(つ)て、  
(卷八「瀨尾最後」五〇二頁)

③ 我と思(は)ん人人々は寄合(へ)や見參せん」とて、縦様横様蜘蛛手十文字に懸破(り)懸廻り戦ひけるが、  
(卷八「法住寺合戦」五一三頁)

④ 木曾三百餘騎、六千餘騎が中へ懸入(り)、堅様横様蜘蛛手、十文字に懸破(り)懸廻り戦ひけるが、  
(卷八「法住寺合戦」五一三頁)

蜘蛛十文字（に）懸破（つ）て、後へつと出（で）たれば、

（卷九「木曾の最後」五三六頁）

⑤ 梶原五百餘騎の大勢の中へ遁入（り）、堅様横様蜘蛛手十文字に懸破（つ）て、颯と引（い）て出（で）たれば、

（卷九「二度の懸」五七〇頁）

(9) 「平家正節」

① 其後太刀を抜て切てまはるに蜘蛛かく繩十文字蜻蛉かへり水車、八つ方透さず切たりけり

（卷四「橋合戦」上五八二頁）

② 敵の中へ破つて人縦様横様蜘蛛十文字に駈破駈廻り戦ひけるか敵餘多討とつて

（卷八「瀬尾最期」下九七九頁）

③ 我と思わん人、は寄合や見參せんとて縦様横様蜘蛛十文字に駈破駈廻り戦ひけるか

（卷八「法住寺合戦」下九九〇頁）

④ 木曾三百餘騎六千餘騎が中へ驅入り縦様横様蜘蛛手十文字にかけ破つて後へつと出たれば

（卷九「木曾最期」上四三九頁）

⑤ 梶原五百餘騎城の中へかけ入堅さま横さま蜘蛛手十文字にかけ破つて颯と引て出たれば

（卷九「二度駈」上三四五頁）

00 「八坂本」

合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」は、全く見られない。

01 「源平闘諍録」

卷一上下・卷五・卷八上下のみ現存する。

① 千葉、小太郎成親生年羅成、十七歳、打、払、角八方、懸、破、蜘蛛十文字、馳、出、遙、澳、

（卷五「加曾利冠者身千田判官代親正合戦事」一〇七頁）

② 抜、太刀、当額、懸、入、大勢、中、蜘蛛十文字、係破通

（卷八上「木曾於瀬田被討事」一七五頁）

③ 木曾、又七十騎並、鎧、鬨懸、豎、横、蜘蛛十文字、懸、散、戦、成、薄紅、裏、表、脱、屈出、

（卷八上「木曾於瀬田被討事」一七六頁）

02 「四部合戦状本」

第二・八欠卷である。

「是くこそ返せ」とて喚きて懸くれば、大勢の中に組む者は無し。十文字に懸け破りたるを、忠綱吉く引きて射たりければ、兼綱の内甲にあたる。

（卷四「頼政最後」一四五頁）

03 「延慶本」

① 明禪長刀ヲフリアゲ、水車ヲマハシケレバ、矢・長刀ニ  
タ、カレテ、四方ニチル。

(卷四「宮南都へ落給事付宇治ニテ合戦事」上三七六頁)

② 敵ノ中ヘヲメイテ懸ケルニ、一人モ組者ナシ。サトアケ  
テゾ通シケル。十文字ニカケワリタルヲ、

(卷四「宮南都へ落給事付宇治ニテ合戦事」上三八一頁)

③ 敵ノ陣ヲ南ヨリ北ヘハタト懸破リテ、後ヘツト通リス。

又取返シテ南ヘ懸通ケリ。城四郎、十文字ニ被懸破テ申ケ  
ルハ、

(卷六「城四郎与木曾合戦事」上六五七頁)

④ 義仲打取テ頼朝ニ見セテ悦バセヨヤ」トテ、ヲメイテ中  
ヘ係入テ、十文字(字)ニゾ戦ケル。

(卷九「義仲都落ル事付義仲被討事」下二一六頁)

(卷八「猿眼赤鬚男事」二一五三頁)

① 長刀をひらめて、のふつら方へとんてかゝりければ、の  
ふ連さしりたりとて十文字にむかひ、やす清そをさつと  
なく。

#### (14)「長門本」

② むまのはなを引返して、十文字にかけ入たりければ、中  
をあけてさつととをす。

(卷八「源三位入道父子自害事」二一八八頁)

③ うちとて頼朝にみせてよろこはれよとて、くつはみをな

らへて、おめいてかけ入て、十もんしにぞ戦ける。

(卷二五「義仲最後合戦事同頸渡事」四一九六頁)

(卷二五「源平盛衰記」)

① 長刀ヲ振上テ水車ヲ廻ケレハ雨ノ降如クニ射ケレトモ長  
刀ニタ、カレテ箭四方ニチル

(卷二五「宇治合戦」二四三三頁)

② 思切馬ノ鼻ヲ引返テ宮ヲ延シ進セント七百餘騎カ中ニ薙  
入ツ、蜘蛛十文字ニ狂ケレハ寄テ組者ハナカリケリ

(卷二五「頼政最後」二四四四頁)

③ 十郎二段バカリ隔、テ水車ヲ廻シ次第ノニ責、寄、テ  
櫓ノ内ヘハネ入ラントスル處ヲ

(卷二二「衣笠合戦」三四四頁)

④ 勅使河原餘スナトテ蜘蛛十文字堅様横様切廻ケレハ三  
百餘騎ノ大勢モ五十餘騎ニ被、懸立テ

(卷三五「東使戦木曾」五二二三頁)

⑤ 木曾ヲ中ニ取籠テアマスナトテ散々ニ戦蛛手十文字ニカ  
ケ破テクト抜テ見タレハ(卷三五「粟津合戦」五二三三頁)

⑥ 平家ノ城郭ニ乱入テ堅マ横マ蜘蛛手十文字ニ馳廻リヲメ  
キ叫テ戦ケレハ(卷三七「義経落鶴越」\*「畠山荷馬」\*馬  
因縁」五三六三頁)



このように、「平家物語」諸本のうち、十五本に用いられる合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」を調査した結果、『源平盛衰記』には六例、『葉子十行本』・『下村時房刊本』・『流布本』・『平家正節』には五例、『平松家本』・『寛一本』・『寛一別本』・『延慶本』には四例、『源平闘諍録』・『長門本』には三例、『百二十句本』・『四部合戦状本』には二例見られた。ただし、『八坂本』や欠巻のある『屋代本』には、該当する語が一例も見当たらなかった。

更に、諸本によって、合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」には、いくつかの形式があり、それらが用いられる場面や、「奮戦動作」も様々であることが分かる。

以上の結果を、合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」の形式と諸本とに分類したものが〈表1〉である。また、〈表2〉には、これらの表現が、諸本のどのような「奮戦動作」として使用されているのかを示した。

なお、場面ごとに見る、諸本の合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」については、第二章として後述したい。

まず、諸本における合戦表現の使用度を、その表現の形式別

に見ると、次のようになる（〈表1〉参照）。

- (1) 「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」型
    - 『平松家本』・『寛一本』・『寛一別本』・『葉子十行本』・『下村時房刊本』・『流布本』・『平家正節』（二例）
    - (2) 「くもで」「十文字」型
      - a 『葉子十行本』・『下村時房刊本』・『流布本』・『平家正節』・『源平盛衰記』（四例）
      - b 『平松家本』・『寛一本』・『寛一別本』・『源平闘諍録』（二例）
    - c 『百二十句本』（二例）
  - (3) 「十文（字）」型
    - a 『延慶本』・『長門本』（二例）
    - b 『四部合戦状本』（二例）
  - (4) 「水車」型
    - a 『源平盛衰記』（二例）
    - b 『延慶本』（二例）
- また、合戦表現の形式別に見た諸本の「奮戦動作」は、次の通りである（〈表2〉参照）。
- (1) 「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」型
    - a 「太刀で敵を斬る動作」（英雄型）として用いられるもの

『覚一本』・『覚一別本』・『葉子十行本』・『下村時房刊本』・『流布本』・『平家正節』

b 「長刀で敵を斬る動作」(英雄型)として用いられるもの  
『平松家本』

(2) 「くもで」「十文字」型

「馬で敵を駆け破る動作」(集団型・英雄型)として用いられるもの

「百二十句本」(集団型のみ)・『平松家本』・『覚一本』・『覚一別本』・『葉子十行本』・『下村時房刊本』・『流布本』・『平家正節』・『源平闘諍録』・『源平盛衰記』(集団型のみ)

(3) 「十文(字)」型

a 「馬で敵を駆け破る動作」(集団型)として用いられるもの

「四部合戦状本」・『延慶本』・『長門本』  
b 「敵に走り向かう動作」(二騎打型)として用いられるもの

『長門本』【注1】

(4) 「水車」型

「長刀を使う動作」(英雄型)として用いられるもの  
『延慶本』・『源平盛衰記』

なお、合戦描写の「集団型」「二騎打型」「英雄型」については、渥美かをる氏が、「集団の動きを主とする(集団型)、個人対個人の合戦(二騎打型)、個人対衆団の合戦(英雄型)」【注2】と示されるのを参考にして分類した。

〈表1〉『平家物語』

	くもで かくなわ 十文字 とんぼ返り 水車	くもで 十文字	十文(字)	水車
屋代本				
百二十句本		1		
平松家本		3		
覚一本		3		
覚一別本		3		
葉子十行本		4		
下村時房刊本		4		
流布本		4		
平家正節	1	4		
八坂本				
源平闘諍録				
四部合戦状本		3	1	
延慶本			3	1
長門本			3	
源平盛衰記				2

〔表2〕

太刀で敵を斬る動作	平			くもで かくなわ 十文字 とんぼ返り 水車
長刀で敵を斬る(長刀を使う)動作				くもで 十文字
馬で敵を駆け破る動作		百・平・ 覚・別・ 策・下・ 流・正・ 關・盛	長・四・延・	十文(字)
敵に走り向かう動作			長	水車
				延・盛

〔注〕「百二十句本」||百・「平松家本」||平・「覚一本」||覚・  
 「覚一別本」||別・「策子十行本」||策・「下村時房刊本」||  
 下・「流布本」||流・「平家正節」||正・「源平闘諍録」||關・  
 「四部合戦状本」||四・「延慶本」||延・「長門本」||長・「源  
 平盛衰記」||盛

以上に掲げる〔表1〕〔表2〕が示すように、

① 合戦場面の常套句としてよく指摘される「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」型以外に、「くもで」「十文字」型、「十文(字)」型、「水車」型の表現が頻出する。

② 特に、「馬で敵を駆け破る動作」に、「くもで」や「十文字」の使用が目立つ。

③ 何よりも、諸本の合戦表現すべてに登場する「十文字」の存在は注目される。

また、外国人宣教師のための日本語教科書・歴史教科書として編まれ、文禄元年(二五九三)、耶穌会の天草学校で印行されたローマ字抄訳本、「天草本平家物語」には、

木曾わ三百余騎で、堅様横様蜘蛛手十文字に駆け破って、六千余騎があなたえざつと駆け出られたれば、

(卷四・四)木曾兼平に行きやうて、三百余騎になつて、また合戦をし、ついに木曾も、兼平も討死せられたこと)

【注3】

というように、「くもで」「十文字」型が一例見られ、「馬で敵を駆け破る動作」として使用されることが分かる。

つまり、「平家物語」の合戦場面に見られる「くもで」や

「十文字」は、早くから、「敵を駆け破る動作」に使用される表現として定着し、形式的には、特に「十文字」型が、様々な形式を持つ合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」の原形をなす存在であったのではないかと考える。

注1 「長門本」の用例①の「十文字」型は、「馬に乗って戦う動作」でないが、特に、個人対個人の戦い表現として取り上げられるため、「二騎打型」に分類した。

注2 渥美かをる「平家物語の基礎的研究」(笠間書院 一九七八年)三四七頁

注3 江口正弘「天章版平家物語対照本文及び総索引」本文篇(明治書院 一九八六年)五〇一頁

## 第二章

『平家物語』諸本は、語り系と増補系(読み本系)の二つに大別され、更に、語り系諸本が一方流(「灌頂巻」を特立するもの)、八坂流諸本(「灌頂巻」を特立せぬもの)として整理されることは、すでに、高橋貞一氏の指摘【注1】により明らかである。

ここでは、諸本の系統別に見た合戦表現「くもで」「かくな

わ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」の発生時期を、その用いられる場面や形式を参考に、考えていきたい。

まず、諸本を、第一章で調査した合戦表現の形式と、その用いられる場面で分類したものが〈表1〉である。なお、〈表1〉の結果を諸本の系統別に比較しやすいように、近藤政美氏が、「中世国語論考」(和泉書院 一九八九年 二五七頁)の中で、渥美かをる氏の研究【注2】を参考にして表示された「諸本の系統と成立時期の大略」を〈図1〉として取り上げた。

〈表1〉・〈図1〉より、合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」の用いられる場面別に見た諸本の系統は、次のようになる。

(1) 語り系諸本(ただし、合戦表現の見られない「屋代本」〈一方流〉、「八坂本」〈八坂流〉は除く)

a 卷四「橋合戦」

(二方流)

『平松家本』・『覚一本』・『覚一別本』・『葉子十行本』・『下村時房刊本』・『流布本』・『平家正節』

b 卷八「妹尾最期」

(二方流)

『葉子十行本』・『下村時房刊本』・『流布本』・『平家正節』

c 卷八「法住寺合戦」

(一方流)

『平松家本』・『寛一本』・『寛一別本』・『葉子十行本』・『下

村時房刊本』・『流布本』・『平家正節』

d 卷九「木曾最期」

(一方流)

『平松家本』・『寛一本』・『寛一別本』・『葉子十行本』・『下

村時房刊本』・『流布本』・『平家正節』

(八坂流)

『百二十句本』

e 卷九「二度之懸」

(一方流)

『平松家本』・『寛一本』・『寛一別本』・『葉子十行本』・『下

村時房刊本』・『流布本』・『平家正節』

(1) 増補系諸本

a 卷四「橋合戦」

『延慶本』・『源平盛衰記』

b 卷四「宮の御最期」

『四部合戦状本』・『延慶本』・『長門本』・『源平盛衰記』

c 卷九「木曾最期」

『源平闘諍録』・『延慶本』・『長門本』

d 卷五「加曾利冠者母千田判官代親正合戦事」

『源平闘諍録』

e 卷八「猿眼赤鬚男事」

『長門本』

f 卷二二「衣笠合戦」

『源平盛衰記』

g 卷三五「東使戦木曾」

『源平盛衰記』

h 卷三七「義経落鶴越 \* (富山馬荷) \* (馬因縁)』

『源平盛衰記』

以上の結果から、

① 語り系一方流諸本の合戦表現は、諸本同士で、同じ場面に使用されることが多い。

② 増補系諸本の合戦表現について、それぞれが、諸本独自(別々)の場面に使用されることが多い。

③ 語り系八坂流諸本では、合戦表現の使用が、一例だけしか見られない。

つまり、語り系一方流諸本と増補系諸本では、合戦表現の使用される場面の種類が全く異なり、増補系諸本の詞章には、語

り系諸本よりも、更に著しい増補のあったことを知ることが出来る。また、『八坂本』に至ると、合戦表現が全く見られなくなる八坂流諸本について、同じ語り系である一方流諸本との性格の違いが見られる。

次に、合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」の発生時期を、系統別に見た諸本の成立時期と、その用いられる表現形式に照らし合わせながら考えていきたい。  
〈表1〉・〈図1〉を参照し、次のように考察する。

(1) 「十文字」型について

① 増補系における「十文字」型は、系統図通り、「四部合戦状本」から『延慶本』・『長門本』に受け継がれ、『源平盛衰記』に至っては、「くもで」「十文字」型に派生した。

② 『延慶本』が『長門本』を基としている【注3】ならば、『延慶本』の「十文字」型が、『長門本』から受け継がれたと考えて、差し支えないだろう。

(2) 「くもで」「十文字」型について

① 増補系においては、「くもで」「十文字」型が、渥美かをる氏により【注4】、現存最古とされる『源平闘諍録』や、集大成本として最も新しい時代に成立されたとする『源平盛衰記』に見られるが、その成立過程にある『四部合戦状

本』・『延慶本』・『長門本』には使用されていない。そこで、高橋貞一氏によれば、次のような指摘がある。

源平闘諍録が現在の平家物語諸異本中において、平家物語の古態を示す一傳本として高く評價すべきであると考へたのであるが、再び全般について考察するに、源平盛衰記、長門本平家よりも後出であると謂うべきである。【注5】

つまり、『源平闘諍録』を『源平盛衰記』の後出とし、「くもで」「十文字」型が、『源平盛衰記』から『源平闘諍録』へ受け継がれたと考えれば、「くもで」「十文字」型は、「十文字」型から派生したと言える。

② 語り系一方流においては、「くもで」「十文字」型が、巻四「橋合戦」の場面の「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」型と同様に、『平松家本』から、『寛一本』・『寛一別本』・『葉子十行本』・『下村時房刊本』・『流布本』・『平家正節』に受け継がれた。

③ 語り系一方流の室町・江戸期成立とされる『葉子十行本』・『下村時房刊本』・『流布本』・『平家正節』の巻八「妹尾最期」の場面において、「くもで」「十文字」型が使用され始めたのは、鎌倉期成立とされる『寛一本』の場面では見ら

れないため、室町期に入ってからである。

- ④ 語り系八坂流である『百二十句本』の「くもで」「十文字」型は、増補系の『四部合戦状本』における「十文字」型が派生したものである。

(3) 「水車」型について

- ① 系統図通り、増補系における「水車」型が、『延慶本』から『源平盛衰記』の巻四「橋合戦」の場面に受け継がれたと考える。しかし、高橋貞一氏は、次のように指摘されている。

延慶本は長門本を基として、源平盛衰記、覚一本を以て増補改訂し、特別に構想作成した本文を有し、複雑な本文である。【注6】

つまり、『延慶本』の成立を『源平盛衰記』以後とし、ここに、「水車」型が、まだ『長門本』には見られない表現であることを考え合わせれば、「水車」型の発生は、『延慶本』ではなく、『源平盛衰記』であったと言える。

- ② 高橋貞一氏によれば、『源平盛衰記』は長門本を基として、覚一本を参照して増補改訂したもの【注7】であるから、本来、増補系の「水車」型は、『源平盛衰記』が、語り系一方流である『覚一本』の「くもで」「かくなわ」「十文字」

「とんぼ返り」「水車」型を参照して、派生したものである。なお、『源平盛衰記』は、「詳細な描写をくり返す【注8】」ことから、「水車」型として、一つの戦い技を具体的に表わしている。

なお、増補系の『四部合戦状本』から、語り系一方流の『屋代本』までの過程において、どのような合戦表現が存在していたかは、『屋代本』の欠巻により不明である。しかし、合戦表現は、『四部合戦状本』を基として、語り系八坂流の『百二十句本』や、一方流の『平松家本』へと受け継がれているため、すでに、『屋代本』にも何らかの形式で、合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」が存在していたと考える。

また、語り系と増補系では、「くもで」「十文字」型の使用される箇所、特徴的な違いがある。ここで、前掲した語り系の『覚一本』と増補系の『源平盛衰記』の一例を比較してみる。

◇「覚一本」(巻九「木曾最期」)

木曾三百餘騎、六千餘騎が中をたてさま・よごさま。如手・十文字にかけわ(ツ)て、うしろへつ(ツ)といでたれば

◇「源平盛衰記」(巻三五「粟津合戦」)

木曾ヲ中ニ取籠テアマスナトテ散々ニ戦如手十文字ニカケ

破テクト抜テ見タレハ

このように、『覚一本』では、「たてさま・よこさま」が「くもで」「十文字」型の前にきているが、『源平盛衰記』には、それが見られない。つまり、「たてさま・よこさま」が、語り系諸本において、常に、「くもで」「十文字」型の前に用いられるのに対し、増補系諸本では、それが一定しないのである。

この「くもで」「十文字」型の前にくる「たてさま・よこさま」については、佐々木八郎氏の『平家物語評講』（明治書院

一九六八年 一〇七二頁）、巻九「木曾最後」の場面に、

「堅さま横さま」と「十文字」とは同じ事を別のことばで重複していったもの。

と語釈されている。つまり、「たてさま・よこさま」は、合戦表現を反復させるための技巧的表現であり、ここに、「語り系諸本が、増補系諸本よりも、文藝的で、真に読み本にふさわしい【注9】」とされる一面を見ることが出来る。

考察の結果、『平家物語』の合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」の発生について、形式別に見ると、次のようになる。

① 「十文字」型

② 「くもで」「十文字」型

③ 「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」型

④ 「水車」型  
という順序で派生したと言える。また、①・②・③・④の表現形式が、最初に使用されたと思われる、系統別に見た『平家物語』諸本は、次の通りである。

① 「十文字」型

【四部合戦状本】(増補系)

② 「くもで」「十文字」型

【平松家本】(語り系一方流)

【百二十句本】(語り系八坂流)

【源平盛衰記】(増補系)

③ 「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」型

【平松家本】(語り系一方流)

④ 「水車」型

【源平盛衰記】(増補系)

このように、合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」それぞれの発生時期を鎌倉時代に成立したとされる諸本、【百二十句本】・【平松家本】・【四部合戦状本】・【源平盛衰記】で確認することが出来る。

つまり、合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ



返り」「水車」の発生が鎌倉時代であったことは、間違いないだろう。

注1 高橋貞一「平家物語諸本の研究」(富山房 一九四三年)

五頁

注2 渥美かをる「平家物語の基礎的研究」(笠間書院 一九七八年)

注3 高橋貞一「平家物語長門本延慶本新考」(和泉書院 一九九三年)二一八頁

注4 注2に同じ。

注5 高橋貞一「統平家物語諸本の研究」(思文閣出版 一九七八年)三〇九頁

注6 注3に同じ。

注7 注3に同じ。86頁

注8 市古貞次編「平家物語研究事典」(明治書院 一九七八年)一七三頁

注9 注2に同じ。一一一頁

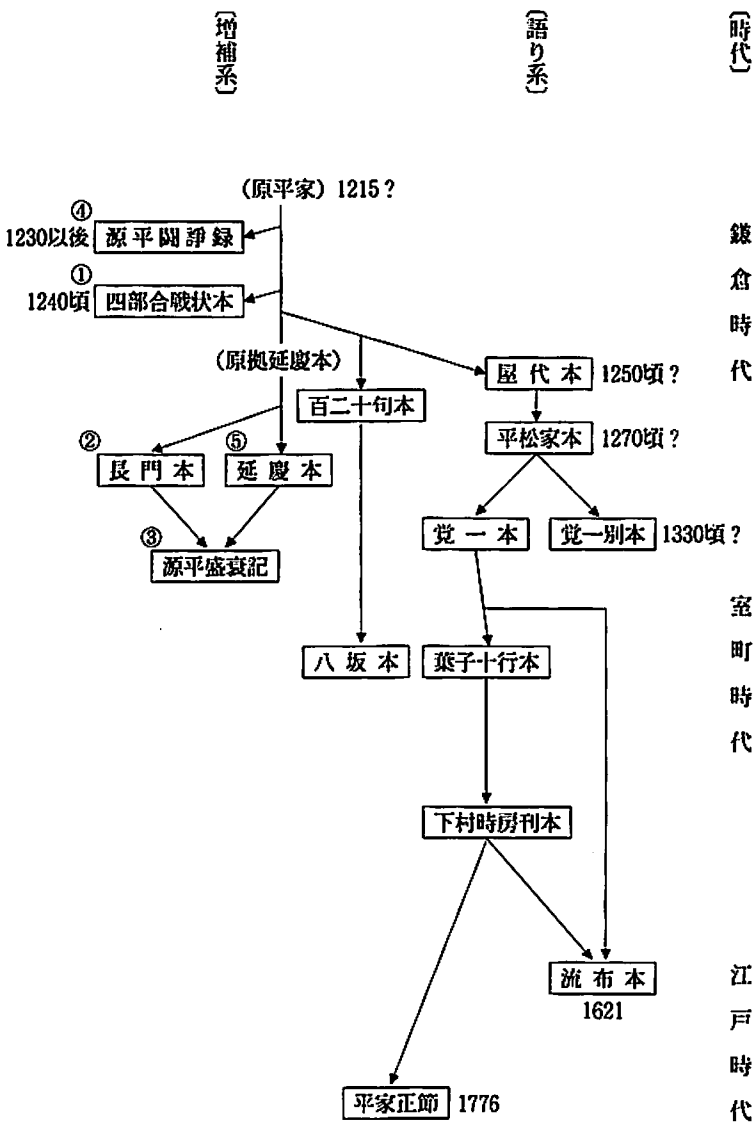
〈表1〉

橋合戦④	平・覚・別・葉・下・流・正	盛	十文(字)	水車
宮の御最期④	盛	四・延・長		
妹尾最期⑧	葉・下・流・正			
法住寺合戦⑧	平・覚・別・葉・下・流・正			
木曾最期⑨	百・平・覚・別・葉・下・流・正 正・闕・長	延		
二度之懸⑨	平・覚・別・葉・下・流・正			
加曾利冠者と千田判官代親 正合戦事・闕⑤	闕			
城四郎与木曾合戦事・延⑥		延		
猿眼赤鬚男事・長⑧		長		
衣笠合戦・盛②				盛
東使戦木曾・盛⑤	盛			
義経落鶴越*〔高山馬荷〕 *馬因縁・盛⑦	盛			

(注) 1 「百二十句本」 百・「平松家本」 平・「覚一本」 覚・  
 「覚一別本」 別・「葉子十行本」 葉・「下村時房刊本」 下・  
 「流布本」 流・「平家正節」 正・「源平闘諍録」 闕・「四部合戦状本」 四・  
 「延慶本」 延・「長門本」 長・

「源平盛衰記」 盛  
 2 章段名は、「覚一本」によった。ただし、一例しか用い  
 られない場合は、その本独自の章段名による。  
 3 章段名下の番号は、巻数。

〔圖1〕『平家物語』諸本の系統と成立時期



〔増補系〕

〔語り系〕

### 第三章

『平家物語』において、合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」は、様々な形式で存在していた。ここでは、『平家物語』と同じジャンルに属し、合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」が多用されると思われる軍記物語や戦記を中心に取り上げていきたい。

なお、合戦についての記録がある雑史・史論・文書なども合わせて見ていく。

まず、時代別にした軍記物語・戦記・雑史・史論・文書などに見られる合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」の用例すべてを挙げてみる。

#### (1) 鎌倉時代

##### 『保元物語』

① 親治おもひきつたる事なれば、くもで十文字に散々にかけやぶりてつつとをす。

(中「官軍方々手分けの事」七二頁)

② 大炊御門西の門を懸よけて、まん中へかけわり、義朝が大勢の中へかけ入て、うちへかけ外へかけ、蜘蛛十文字に

一もみもむでさんくにぞ戦たる。

(中「白河殿攻め落す事」一一六頁)

##### 『平治物語』

五百余騎のまんなかへわけ入、西より東、北より南へ、たてさま横さま蜘蛛十文字に敵をざつとけちからかして、つかけいで、

(中「待賢門の軍の事付けたり信頼落つる事」二二三五頁)

#### (2) 室町時代

##### 『伯耆之巻』

乙童丸。義貞。義氏。是を始として若黨ともに廿二三人。此大勢の中に走入。蜘蛛十文字に散々に切廻る。

(四・二二三頁)

##### 『應永記』

今日ヲセンドノ合戦ナレバ。堅横十文字。向敵ヲ悦デ切テ廻リケルガ。

(六・三一頁)

##### 『應仁記』

前後ノ敵ニ十文字八ツ花ガタニ切テマハリ。

(八・四〇四頁)

##### 『應仁別記』

前後ノ敵ニ十文字八ツ花ガタニ切テマハリ。

『鎌倉大草紙』

(二〇・四九九頁)

性順。景仲は只壹手に成て魚鱗に連て。荒手を先に立てて  
手十文字にかけ破りしかば。 (中・一四・七三九頁)

『結城戰場物語』

にしより東へおひまくり。きたよりみなみへおひまはし。  
たてざまよこざま十文字にてきをさつとふみちらし。おひ  
たてくせめ戦ふ。 (二五・七二八頁)

『相州兵亂記』

① 神崎周防守。中村壹岐守等敵ノ中ヲ破テ細手十文字ニ懸  
散。喚ビテ蒐ル。

(卷二「持氏満貞御最後事」一六・六八八頁)

② 手勢六騎。長刀水車ニ廻シ。敵ノ中ヘワツテ入。

(卷二「小田原軍之事并大森敗北之沙汰」一六・七〇〇頁)

③ 三ツ鱗ノ旗ト中白ノ旗入交リ。十文字ニワツテ通り巴ノ  
字ニ追廻シ。東西南北ニ馳進テ戦シガ。

(卷三「義同討死事」一六・七〇六頁)

④ 大山ノ崩ルヤウニ拔連テ切テ掛リ。十文字ニ割テ通り。  
巴ノ字ニ追廻シ。東西南北ニ打破リ馳進フ。

(卷三「府中軍之事」一六・七二六頁)

⑤ 氏康ハ大道寺ヲ初トシテ印浪。荒川。諏訪。橋本鎧ヲ披  
入々々十文字ニカケ破リ。巴ノ字ニ追廻シ。

(卷四「河越之夜軍之事」一六・七三二頁)

(3) 戦国時代(室町後期)

『さゝこおちのさうし』

ひごろならいしなぎなたをみづくるまにまわして。よせき  
たるかたきをにしひがしへおつゝめてさんをみだしてきり  
ふする。 (二八・二七頁)

『なかおのちのさうし』

こどのよりもたまはりけるこなきなたの候を。私ながくを  
つとりのべつゝ。にしよりひがしへももんぢ。きたからみ  
なみへももんぢ。やつはながたといふまゝに。さんくゝに  
きつてまはりしを。 (二八・三六頁)

『上野國群馬郡箕輪軍記』

伊安弟を討れ無念に思ひむらがる中へ割て入。長刀を振廻  
し。くもでかくなは十文字。かげろふ稻妻水の月。水車に  
廻し切ければ。

(下「箕輪城。安中。松井田落城之事」二〇・一〇六頁)

『富樫記』

① 高角打タル甲ノ緒ヲ縮メ。六尺三寸ノ太刀水車ニ舞シ。

郎等三人鋒ヲ並べ山内衆ニ截懸ル。(二三・二八九頁)

② 件ノ棒ヲ追取り三方ヲ指固メ一方ニ追向ヒ。而モ不  
振打テ懸ル。芝薙キ石突キ木葉返シ水車。徳山ガ手段極山  
ガ秘密ノ手。一手モ不<sub>レ</sub>殘散々ニ打廻ル。

(二三・二九二頁)

③ 提切。架竈掛。拂截。退待一太刀切。象戲倒撥切。礮打  
浪蹴切。亂紋。菱繫。蜘蛛角繩。四角八方追立々々切廻ル。

(二三・二九二頁)

『荒山合戦記』

① 大長刀ヲ水車ニ廻小躍シ走掛。左右拂前後ヲ雉テ巡タル  
ニ (二四・三一九頁)

② 三宅備後守ハ長刀ノ名人ニテ大勢ニ渡合。込手開手裁ツ  
掛ツ突ツ斬ツ。蜻蛉返。水車。八方不<sub>レ</sub>透斬タレバ。

(二四・三二〇頁)

『豫章記』

蓮華下院ノ東ヨリ敵ノ真中ニ蒐入テ。蛛手カクナハ十文字  
ニ蒐亂シ。弓手妻手ニ相付。散々ニ打散サント云ケレバ。

(二八・五三〇頁)

(4) 江戸時代

『太平記』(慶長八年古活字本)

① 前ニツキ雙タル持楯一帖岸破ト蹈倒シ、二尺八寸ノ小長  
刀水車ニ回シテ躍リ懸ル。

(卷二「師賢登山事付唐崎濱合戦事」一八八頁)

② サレ共越王勾踐ハ破<sub>レ</sub>堅權<sub>レ</sub>利事、項王ガ勢ヲ吞、樊噲  
勇ニモ過タリケレバ、大勢ノ中へ懸入、十文字ニ懸破、巴  
ノ字ニ追廻ラス。

(卷四「備後三郎高德事付吳越軍事」一四三頁)

③ 我等ハ手勢ヲ引勝テ、蓮華下院ノ東ヨリ敵ノ中へ驅入リ、  
蜘蛛十文字ニ懸破リ、弓手妻手ニ相付テ、

(卷八「持明院殿行幸六波羅事」一二四九頁)

④ 我ト思ハン武士共、ヨレヤ、打物シテ、自餘ノ輩ニ見物  
セサセン。」ト云儘ニ、四尺餘ノ大長刀水車ニ廻シテ、跳  
懸々々火ヲ散シテゾ切タリケル。

(卷八「山徒寄京都事」一二五九頁)

⑤ 新田義貞退兵ヲ引勝テ、敵ノ大勢ヲ懸破テハ裏へ通り、  
取テ返テハ喚テ懸入、電光ノ如<sub>ク</sub>激、蜘蛛・輪違ニ、七八  
度方程ゾ當リケル。

(卷一〇「新田義貞謀叛付天狗催越後勢事」一三三六頁)

⑥ 三浦平六是ニカヲ得テ、江戸・豊嶋・葛西・河越、坂東  
ノ八平氏、武藏ノ七黨ヲ七手ニナシ、蜘蛛・輪違・十文字

ニ、不、餘トゾ攻タリケル。

(卷二〇「三浦大多和合戰意見事」1329頁)

⑦ 義貞ノ兵共蜘蛛・十文字ニ被<sub>レ</sub>懸散<sub>テ</sub>、若宮小路へ廻ト引テ、人馬ニ息ヲソ繼セケル。

(卷一〇「鎌倉兵火事付長崎父子武勇事」1340頁)

⑧ 勝誇タル敵ナレバ何カハ少シモ疼ムベキ。十字ニ合テ八字ニ破ル。大中黒ト二ツ引兩ト二ノ旌ヲ入替々々、東西ニ靡キ南北ニ分レ、萬卒ニ面ヲ進メ一舉ニ死ヲソ争ヒケル。

(卷二四「箱根竹下合戰事」261頁)

⑨ 三百餘騎ヲ一手ニナシ、敵ノ真中ヲ懸破テ、蜘蛛十文字ニ懸立ント喚テ懸リケレ共、

(卷三一「武藏野合戰事」3183頁)

⑩ 敵却テ勝ニ乘シカバ、嶺々谷々ヨリ、五百騎三百騎道ヲ要へ前ヲ進テ、蜘蛛十文字ニ懸立ル。

(卷三二「神南合戰事」3236頁)

⑪ 何かハ些モ可<sub>レ</sub>擬議、大勢ノ真中ニ懸入テ十文字巴ノ字ニ懸散シ、鶴翼魚鱗ニ連テ東西南北ニ馬ノ足ヲ不<sub>レ</sub>惱

(卷三五「尾張小河東池田事」3337頁)

なお、⑧は、「十文」だが、右に「ジフモンジ」の読みが記されているため、「十文字」と同様に考える。

『曾我物語』(慶長十年頃十行本)

され共、越上段は、かたきをやぶり、かたきをくだく事、大勢にこえたる人なりければ、事ともせず、かの大勢の中にかけて、十文字にかけやぶり、おひまはして、一所にあわせて、(卷五「呉越のた、かひの事」237頁)

『大友記』

薩州勢コレニ氣ヲ得。蜘蛛十文字ニワツテ通ル。

(一九・五八八頁)

このように、合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」と「んぼ返り」「水車」の使用を調査した結果、〈軍記物語・戦記〉『太平記』には一例、『相州兵亂記』には五例、『富樫記』には三例、『保元物語』・『荒山合戰記』には二例、『平治物語』・『應永記』・『應仁記』・『應仁別記』・『鎌倉大草紙』・『結城戰場物語』・『さくこおちのさうし』・『なかおちのさうし』・『上野國群馬郡袋輪軍記』・『曾我物語』・『大友記』には一例、〈雑史〉『伯耆之卷』・『豫章記』には一例、見られた。

ただし、次の作品には、合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」が見当たらない。

〈軍記物語・戦記〉

『將門記』・『純友追討記』・『陸奥語記』・『承久記』・『承久軍

物語」・「義経記」・「奥州後三年記」・「明德記」・「嘉吉記」・  
 「新撰長祿寛正記」・「文正記」・「應仁略記」・「永祿記」・「細  
 川兩家記」・「勢州四家記」・「内外兩宮兵亂記」・「豆相記」・  
 「河越記」・「深谷記」・「房總治亂記」・「鹿島治亂記」・「江農  
 記」・「江北記」・「船田前記」・「船田後記」・「羽尾記」・「盛名  
 家記」・「蒲生氏郷記」・「伊達日記」・「柴田退治記」・「小松軍  
 記」・「末森記」・「赤松記」・「赤松再興記」・「別所長治記」・  
 「播州御征伐之事」・「大内義隆記」・「中國治亂記」・「阿州將  
 尙記」・「三好家成立之事」・「三好別記」・「上月記」・「荒木略  
 記」

〔雜史〕

〔十河物語〕・「雑太平記」

〔通史〕

〔豐鑑〕

〔史論〕

〔梅松論〕

〔文書〕

「親房御被贈結城狀」・「吉野御事書案」・「阿蘇大宮司惟澄申  
 狀」・「菊地武朝申狀」・「上杉輝虎進狀」・「豐臣太閤御事書」・  
 「沙彌洞然長狀」

以上の結果を、合戦表現の形式と軍記物語・戦記・雑史とに  
 分類したものが〈表1〉である。また、〈表2〉には、これら  
 の表現が、軍記物語・戦記・雑史において、どのような「奮戦  
 動作」として使用されるのかを示した。

軍記物語・戦記・雑史における合戦表現の使用度を、その表  
 現の形式別に見ると、次のようになる（〈表1〉参照）。

- (1) 「十（文）字」型
  - a 「相州兵亂記」（三例）
  - b 「太平記」（二例）
  - c 「應永記」・「結城戰場物語」・「曾我物語」（二例）
- (2) 「くもで」「十文字」型
  - a 「太平記」（四例）
  - b 「保元物語」（二例）
  - c 「平治物語」・「伯耆之巻」・「鎌倉大草紙」・「相州兵亂記」・  
 「大友記」（二例）
- (3) 「くもで」「かくなわ」「十文字」型
  - 「豫章記」（二例）
- (4) 「十文字」「巴の字」型
  - 「太平記」（二例）
- (5) 「十文字」「八つ花形」型



『應仁記』・『應仁別記』・『なかおちのさうし』(一例)

(6) 「くもで」「輪違」「十文字」型

『太平記』(一例)

(7) 「くもで」「かくなわ」「十文字」「かげろう」「桶妻」「水の月」

「水車」型

『上野國群馬郡資輪軍記』(一例)

(8) 「くもで」「かくなわ」型

『富樫記』(一例)

(9) 「くもで」「輪違」型

『太平記』(一例)

(10) 「とんぼ返り」「水車」型

『荒山合戦記』(一例)

(11) 「水車」型

a 『富樫記』・『太平記』(一例)

b 『相州兵亂記』・『さゝこおちのさうし』・『荒山合戦記』

(一例)

また、合戦表現の形式別に見た軍記物語・戦記・雑史の「畜戦動作」は、次の通りである(表2参照)。

(1) 「十(文)字」型

a 「馬で敵を駆け破る(斬り回る)動作」(集団型・英雄型)

として用いられるもの

『應永記』(英雄型)、『結城戰場物語』・『相州兵亂記』・

『太平記』・『曾我物語』(集団型)

b 「馬で敵に当たる動作」(集団型)として用いられるもの

『太平記』

(2) 「くもで」「十文字」型

「馬で敵を駆け破る(斬り回る)動作」(集団型)として用いられるもの

『保元物語』・『平治物語』・『伯耆之卷』・『鍛冶大草紙』・

『相州兵亂記』・『太平記』・『大友記』

(3) 「くもで」「かくなわ」「十文字」型

「馬で敵を駆け破る動作」(集団型)として用いられるもの

の

『豫章記』

(4) 「十文字」「巴の字」型

「馬で敵を駆け破る動作」(集団型)として用いられるもの

の

『太平記』

(5) 「十文字」「八つ花形」型

「馬で敵を斬り回る動作」(英雄型)として用いられるもの

の

『應仁記』・『應仁別記』・『なかおちのさうし』

(6) 「くもで」「輪違」「十文字」型

「馬で敵に当たる動作」(集團型)として用いられるもの

『太平記』

(7) 「くもで」「かくなわ」「十文字」「かげろう」「稲妻」「水の月」

「水車」型

「長刀で敵を斬る動作」(英雄型)として用いられるもの

『上野國群馬郡資輪車記』

(8) 「くもで」「かくなわ」型

「太刀で敵を斬る動作」(英雄型)として用いられるもの

『富樫記』

(9) 「くもで」「輪違」型

「馬で敵に当たる動作」(集團型)として用いられるもの

『太平記』

(10) 「とんぼ返り」「水車」型

「長刀で敵を斬る動作」(英雄型)として用いられるもの

『荒山合戦記』

(11) 「水車」型

a 「太刀で敵を斬る動作」(英雄型)として用いられるもの

『富樫記』

b 「長刀で敵を斬る(長刀を使う)動作」(英雄型)として

用いられるもの

「相州兵亂記」・『さゝこおちのさうし』・『荒山合戦記』

『太平記』

c 「棒で敵を打つ動作」(英雄型)として用いられるもの

『富樫記』

以上に掲げる(表1)・(表2)が示すように、軍記物語・

戦記・雑史における合戦表現の形式は、第一章の『平家物語』

より多く、新たに、「巴の字」「八つ花形」「輪違」「かげろう」

「稲妻」「水の月」が加わっている。

『日本国語大辞典』(小学館)によれば、「巴の字」「八つ花

形」「輪違」「かげろう稲妻水の月」について、次のような説明

がある。

(1)はのじ〔巴字〕

〔巴〕の字の篆書(てんしよ)体の形から)ともえの形。

物がぐるぐる回るさまにいう語。

(2)やつはながた〔八花形〕

①円形の周間に花卉のような角の八つある形。やつはなざ

き。やつはな。

② 剣道の手の一つ。

(3) わちがい〔輪違〕

円形の輪をずらして組み違いとした形。またそのさま。わちがえ。

(4) かげろう稲妻(いなづま)水(みず)の月(つき)

手に取るができないものたえ。また、動作がすばやくて身軽なものたえ。

つまり、「巴」の字「八つ花形」「輪違」「かげろう」「稲妻」

「水の月」は、どれも「奮戦動作」に関係のある表現に違いない。

ここで、戦国時代成立の『上野國群馬郡箕輪軍記』に見られる独特な表現「かげろう稲妻水の月」に注目してみる。

第一章・第二章に掲げた『平家物語』の表現形式より、「くもで」「かくなわ」「十文字」「かげろう」「稲妻」「水の月」「水車」型が、「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」型から派生した表現であろうと予想される。

そこで、『日本国語大辞典』第四卷(小学館 一九七三年)

「かげろう」の項に、次のような説明を見付けた。

(1) かげろう〔蜻蛉・蜻蛉〕

「とんぼ(蜻蛉)」の古名。かぎろう。

(2) とんぼ

「とんぼがえり(蜻蛉返)」の略。

つまり、「とんぼ返り」から、同じ意味を持つ「かげろう」を連想したのだろう。また、「かげろう」「稲妻」「水の月」を用いた理由も、「水の月」が、後者「水車」の「水」に関係する語であったからだと考えられ、「くもで」「かくなわ」「十文字」「かげろう」「稲妻」「水の月」「水車」型は、実に技巧性あふれた表現と言える。

次に、合戦表現が使用される「奮戦動作」に注目してみると、「水車」型に、「平家物語」とは異なる新たな「奮戦動作」が存在していることが分かる。

ここでは、戦国時代の戦記『富樫記』の「水車」型に、「敵を棒で打つ動作」が見られ、江戸後期の故実書『武家名目抄』巻八・術藝部・五「棒」にも、この「富樫記」から抜粋されたと思われる同様の記録が、取り上げられている。

今度有 棒手 宣追 取件棒 指 搦三方 追 向一方  
不 振 面打懸芝薙石突木集返水車徳山ノ手段秋山之秘密  
之手不 殘 一手 散々打回【注一】

つまり、ここに、刀使いではない、棒術としての「水車」型が存在し、合戦表現における「奮戦動作」の多様性を見ること

が出来る。

以上、平安時代から江戸時代に渡る軍記物語・戦記・雑史において、様々な合戦表現、「奮戦動作」の存在を確認した。

特に、「八つ花形」は、室町時代成立の『應仁記』・『應仁別記』、戦国時代成立の『ななおくちのさうし』に、「かげろう稲妻水の月」は、戦国時代成立の『上野國群馬郡資輪車記』に、「巴の字」「輪遶」は、江戸時代書写の『太平記』に、それぞれ新しく登場した表現であり、室町時代以降、合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」には、多くの派生形を見ることが出来る。

また、鎌倉時代から江戸時代に渡る作品の合戦場面には、『平家物語』と同様、「くもで」や「十文字」を使用した「馬で敵を駆け破る動作」が目立ち、早くから、騎馬戦の表現方法として定着していたことが分かる。

注1 増訂故實叢書『武家名目抄』巻八・奥馬、術藝、軍陣、雑部（吉川弘文館・日用書房 一九〇三年）三三四頁

〔表1〕軍記物語・戦記・雑史

保元物語										十(文)字	くもて 十文字	くもて かくなわ 十文字	十文字 巴の字	十文字 八つ花形	くもて 十文字	くもて・かくなわ・ 十文字・水の月・水車	くもて かくなわ	くもて 輪違	とんぼ は返り 水車	水車
平治物語											1									
伯耆之巻											1									
源水記		1																		
應仁記														1						
應仁別記														1	1					
鎌倉大草紙											1									
結城戰場物語		1																		
相州兵亂記		3									1									
しなこおのちのさう																				
しなこおのちのさう																				1
上野國群馬郡森輪																				1
軍記																				1
富樫記																1				2
荒山合戦記																				1
豫章記												1								
太平記		2											1							
曾我物語		1									4				1					
大友記																				

〔表2〕

馬で敵を斬る動	馬で敵を斬り破る (斬り回る)動作	棒で敵を打つ動作	長刀で敵を斬る 作(長刀を使う)動	太刀で敵を斬る動	
太	太・永・結・相 曾				十(文)字
	大鎌・保・相・太・伯				くもて 十文字
	豫				くもて かくなわ 十文字
	太				巴文字 十文字
	な仁・仁別				八つ花形 十文字
太					くもて 輪違 十文字
			上		くもて・かくなわ・ 稲妻・水の月・水車 十文字
				富	くもて かくなわ
太					くもて 輪違
			尻		水車 とんぼ返り
		富	荒相・太・さ	富	水車

(注) 「保元物語」 〓 保・「平治物語」 〓 平・「伯耆之巻」 〓 伯・  
「應永記」 〓 永 「應仁記」 〓 仁・「應仁別記」 〓 仁別・「鎌倉  
大草紙」 〓 鎌・「結城戰場物語」 〓 結・「相州兵亂記」 〓 相・  
「さゝこおちのさうし」 〓 さ・「なかもちのさうし」 〓 な・  
「上野國群馬郡箕輪軍記」 〓 上・「富樫記」 〓 富・「荒山合戦  
記」 〓 荒・「豫章記」 〓 豫・「太平記」 〓 太・「曾我物語」 〓  
曾・「大友記」 〓 大

## 第四章

これまで取り上げた合戦場面中心の軍記物語・戦記・雑史には、独特な形式を持つ合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」が多く見られた。

ここでは、特に、合戦を題材としているような御伽草子、謡曲、幸若舞曲、浄瑠璃を取り上げ、それぞれの場面に見られる合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」の存在を調査したい。

まず最初に、時代別にした御伽草子、謡曲、幸若舞曲、浄瑠璃に見られる合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」の用例すべてを挙げてみる。

なお、第一章・第二章で取り上げた『平家物語』からの影響を見るため、作品は主に、『平家物語』に取材したものを選んだ。

### (1) 南北朝時代

〈御伽草子〉

『秋夜長物語』（永和三年写本）

敵三百余人ガ中エ只一人亂（レ）入（リ）、提切、袈裟切、

車切、背テ持テル一ノ刀、シサリテ進ム追懸切、將木倒（シ）ノ撥ヒ切、磯打（ツ）波ノマクリ切、亂紋、菱縫、蜘蛛手、カクナハ、十文字、四角八方ヲ追立（テ）テ、足ヲモタメ得ス切（ツ）テ廻ル。（四七五頁）

### (2) 室町時代

〈御伽草子〉

『弁慶物語』（チェスター・ピーティー図書館蔵室町末期写）  
『武藏坊絵縁起』（絵巻二卷）

① 長刀の鞘外し、西より東に一文字、北から南に十文字、蜘蛛手、香泡、八花形といふ物に割りつけく斬りければ、

（中・二四一頁）

② 金色良かりし長刀を走りかゝつて奪ひ取り、西から東、北から南、蜘蛛手、香泡、八花形といふものに、割り付け

く斬りければ、

（下・二八二頁）

〈謡曲〉

『兼平』

一騎、當千の秘術をあらはし、大勢を、あはづの、汀におつめて、磯うつ浪のまくりぎり、蜘蛛十文字に、打ちやぶりかけ通つて、

（二二八頁）

『船』

郎等三騎にうしろをあはせ、向ふ者をば排みうち、又廻りあへば車ぎり、くもでかくなわ十文字、かくよく、ひぎやうの秘術をつくすと、見えつるうちに (二二二頁)

(3) 安土桃山時代

〔御伽草子〕

『鴉鷲合戦物語』(尊経閣文庫蔵文禄三年写本)

① 名ヲ得タル兵ナレハ、射ヲモ切ヲモ顯ス、此方ノ岸ニ打上レハ、皆蜘蛛手ニ懸ナサレテ、城中ニ逃籠ル、

(下・九二頁)

② 何かシカ手ニ懸申ントテ、四尺余ノ長刀、手車ニ廻シテ、合モナク懸ル (下・九三頁)

(4) 江戸時代

〔御伽草子〕

『鴉鷲合戦物語』(東京大学附属図書館蔵寛永頃古活字本)

① 敵あし／＼にみえたる所を父子三騎とつて返し、一文字十文字に破りて通り、(中・九「両方軍手分、九月六日合

戦、鴉追善、雀懸梓事」一四五頁)

② 名を得たるつはもの共なれば、射るをも切るをもかへりみず、こなたの岸にうち上ぐれば、竹、蜘蛛の子に駆けなされて城の中に逃げ籠もる。(中・九「両方軍手分、九月

六日合戦、鴉追善、雀懸梓事」一四七頁)

③ なにがしが手に懸け申さん」とて四尺あまりの長刀、水車に廻し、会釈もなくかゝる。(中・九「両方軍手分、九月六日合戦、鴉追善、雀懸梓事」一五一頁)

月六日合戦、鴉追善、雀懸梓事」一五一頁)

なお、(寛永頃古活字本) ①の「十文字」が(文禄三年写本)にはない。前者①の「蜘蛛手」は、後②では「蜘蛛の子」になっている。また、後③の「水車」は、前②では「手車」になっている。

『弁慶物語』(国会図書館蔵元和七年写本)

① やがて太刀を、すわとぬき、なかをわつてぞ、通りける、くもでかくなわに、きつてまわる。(上・二二六頁)

② 雑人の持たる長太刀、奪取、豎棟、横棟、十文字、馬武者、かちだちお、きつわす、散々に切てぞ、まわりける (下・二二七頁)

なお、(室町末期写「武藏坊絵縁起」) ①と、(元和七年写本) ①、また、前者②と後②は、それぞれ合戦表現が異なる。

『じぞり弁慶』(延宝寛文頃写)

弁慶か、としころ、ならひえたる、兵法は、こらん、せいかん、にういんけん、こむて、なく手、ひらくて、十もんし、などといふ、なきなたの、ひしゅつをつくして、たゝ



かへり

(下・五三三頁)

〔幸若舞曲(舞の本)〕

〔信田〕(寛永整版本)

棒を使ふ兵法に、芝薙、石突、払打、木の葉返し、水車。

馬、人嫌はず打ち伏する。(八六頁)

〔景清〕(寛永整版本)

大勢の中へ分つて入り、西から東、北から南、蜘蛛手、結

果、十文字、八つ花形といふものにわり立て、追ん廻して、

さんぐくに切つたりけり。(二五三頁)

〔烏帽子折〕

〔東京大学総合図書館蔵霞亭文库本〕(寛永整版本)

① 大勢の中へ割つて入り、西から東、北から南、蜘蛛手、

結果、十文字、八つ花方といふものに割り立、追ん廻して、

散散に切つて廻る。(三三八頁)

② 長範、この由見るよりも、「是非、某手並見せん」と云

まゝに、六尺三寸の、さても長刀、水車に廻ひて、源にわ

たり合ふ。(三三八頁)

〔京都大学付属図書館蔵幸若直熊本〕(寛永二年)

① 長半此由聞ヨリモ無念ノ次第カナ其ワツハニテナミ見セ

ント云マ、ニ八尺五寸ノ棒ヲハ水車ニマワイテ源ニワタリ

ヲフ

(三七四頁)

② 長半是ヲ見テ六尺三寸ノサテモ長刀水車ニマワイテ源ニ

ワタリアウ(三七四頁)

なお、前者(霞亭文库本)①の「蜘蛛手」「結果」「十文字」

「八つ花方」が、後者(幸若直熊本)にはない。後者①の「水

車」は、前者には見られない。

〔堀川夜討〕(寛永整版本)

① 吉盛、此由見るよりも、大勢の中へ割つて入り、西東、

北南、蜘蛛手、結果、十文字、八つ花形といふものに、割

り立て、追ん廻して、さんぐくに切つたりけり。

(三六三頁)

② 長刀の切手には、込む手、薙ぐ手、開く手、後ろを切る

は、中切り、小波切りに、水車、切り込み、脇込み、叩く

開打ち、捨て刀、随分大事の秘所の手を、残さずこそは遣

ひけれ。(三六六頁)

〔四国落〕(寛永整版本)

是こそ戦の手始め、大勢の中へ割つて入、西から東、北か

ら南、蜘蛛手、結果、十文字、八花形といふものに、割り

立て、追ん廻して、さんぐくに斬つたりけり。

(二七六頁)

『清重』(寛永整版本)

そこを退くな」と言ふまゝに、大勢の中へ割つて入り、西東、北南、蜘蛛手、結果、十文字、八花形といふものに、割り立て、追ん廻して、さんぐに切たりけり。

(四三七頁)

『高館』(寛永整版本)

大勢の中へ割つて入り、西から東、北から南、蜘蛛手、結果、十文字、八花形といふものに、割り立て、追ん廻し、散ぐに切たりけり。

(四五五頁)

『夜討曾我』(寛永整版本)

相撲の手に、向かふ突き、逆突き、鴨が入首、水車、掛くればはづし、入れば余す。

(五三四頁)

〈浄瑠璃〉

『けいせい反魂香』

敵の中へ駆け入って命限りに追ひ散らさんと。大勢に割つて入り西から東北から南。蜘蛛結果十文字割り立て追ん廻し。散々に斬り立てられ。

(二四四頁)

『傾城掛物揃』

こゝにもみ立かしこにをひこめくもでつるかけますすかけわたり、十もんじにきりたてられかせにこぬかのちるごとく、

むらぐばつとぞにげたりける

(中・六七八頁)

『ひらかな盛衰記』

① 此巴が付きそふからは。敵何万騎有とて。我命の頼かんだだけかたはし撫切拜打。蜘蛛手輪違十文字。十方八方打立。追立まくり立せひ一方打破って駆遁。

(二・一一三頁)

② 花服こそ能敵と多勢が中に取込なば。太刀眞向にかざしの花の。ちりぐばつと追ちらし向ふ者を拜打ヌ。廻あはゞ車切。蜘蛛手かくなは十文字。蝠翼飛行の秘術とつくし聲を取。

(四・一八九頁)

『義経千本桜』

① 我轉變の通力にて。衆徒を残らずたばかつて。此館へ引入く。眞向立割車切。又一時にか、つし時。蜘蛛かくなは十文字。或は右袂左袂。上を拂へば沈んで請。裾を拂はゞひらりと飛。けいしやう秘術は得たりや得たり

(四「河連館狐の段」二二七頁)

② 只一刀と討かくる。四郎兵衛が太刀先をほらふ長刀水車。草摺の音鏝の音。ちりぐんはたく。しつてうぐげに。目ざましき働也。

(五「吉野山の段」五三三頁)

『源平布引籠』

横田が諸脚殿宇なぐりにとんぼう返り。情老道さじとむしゃ  
ぶり付ば。まっかせ合点と向ふ突。(二・七六頁)

『平家女護嶋』

嵐を追っかけ嵐を追っつめ橋わり。石割り。岩切坊。發志  
院にはとんぼう返りの通明法師。矢くりの小聖夜又新發意。  
榎の木寺になつた僧正元興寺に鐵僧都。(二・九八頁)

『一谷鐵軍記』

心得多勢を相手にしてひるまず去らず三人が。蜘蛛かくな  
は十文字。或は大げさ車切。太刀長刀の稻妻に。

(三二三頁)

このように、御伽草子、謡曲、幸若舞曲、浄瑠璃に見られる  
合戦表現を調査した結果、(御伽草子)『弁慶物語(武藏坊絵縁  
起)』・『弁慶物語(元和七年写本)』・『鴉鷲合戦物語(寛永頓古  
活字本)』には二例、『秋夜長物語』・『鴉鷲合戦物語(文禄三年  
写本)』・『じぞり弁慶』には二例、(謡曲)『兼平』・『旗』には  
一例、(幸若舞曲)『烏帽子折(霞亭文庫本)』・『烏帽子折(幸  
若直熊本)』・『堀川夜討』には二例、『信田』・『景清』・『四国落』・  
『清重』・『高館』・『夜討曾我』には一例、(浄瑠璃)『ひらかな  
盛衰記』・『義経千本桜』には二例、『けいせい反魂香』・『傾城  
掛物揃』・『源平布引籠』・『平家女護嶋』・『一谷鐵軍記』には一

例、見られた。

ただし、次の作品には、合戦表現「くもで」「かくなわ」「十  
文字」「とんぼ返り」「水車」が見当たらない。

〈謡曲〉

『景清』・『敦盛』・『清経』・『実盛』・『忠度』・『八島』・『頼政』・  
『通盛』・『鶴』・『熊野』・『俊寛』・『小督』・『千壽』・『盛久』・  
『舟辨慶』・『正尊』・『絃上』・『経政』・『巴』・『大原御幸』・  
『藤戸』・『鸞』・『土蜘蛛』

〈幸若舞曲(舞の本)〉

『入鹿』・『大織冠』・『百合若大臣』・『満仲』・『伊吹』・『夢合  
せ』・『馬揃』・『衣出』・『築島』・『碓黄が島』・『文学』・『木曾  
願書』・『敦盛』・『那須与一』・『伏見常葉』・『常葉問答』・『笛  
の巻』・『未来記』・『腰越』・『宮樫』・『笈搜』・『八島』・『元服  
曾我』・『和田酒盛』・『小袖曾我』・『劍讃嘆』・『十番切』・『新  
曲』

〈浄瑠璃〉

『鎌倉三代記』・『出世景清』・『國性爺合戦』・『須磨都源平卿  
圖』・『壇浦兜軍記』

以上の結果を、合戦表現の形式と、御伽草子、謡曲、幸若舞  
曲、浄瑠璃それぞれの作品とに分類したものが(表1①)御伽

草子、〈表2①〉謡曲、〈表3①〉幸若舞曲、〈表4①〉浄瑠璃である。また、〈表1②〉御伽草子、〈表2②〉謡曲、〈表3②〉幸若舞曲、〈表4②〉浄瑠璃には、合戦表現がそれぞれの作品において、どのような「奮戦動作」として使用されているのかを示した。

まず、御伽草子（Ⅱ御）、謡曲（Ⅱ謡）、幸若舞曲（Ⅱ幸）、浄瑠璃（Ⅱ浄）における合戦表現の使用度を、その表現の形式別に見ると次のようになる（〈表1①〉・〈表2①〉・〈表3①〉・〈表4①〉参照）。

(1) 「十文字」型

御『鴉鷺合戦物語』（寛永頃古活字本）・『弁慶物語』（元和七年写本）（二例）  
年写本）・『じざり弁慶』（二例）

(2) 「くもで」「十文字」型  
謡『兼平』（二例）

(3) 「くもで」「かくなわ」「十文字」型  
御『秋夜長物語』（二例）  
謡『履』（二例）

浄『けいせい反魂香』・『ひらかな盛衰記』・『義経千本桜』・  
『一谷嫩軍記』（二例）

(4) 「くもで」「輪遊」「十文字」型  
浄『ひらかな盛衰記』（二例）

(5) 「くもで」「かくなわ」「十文字」「八つ花形」型

幸『景清』・『烏帽子折（霞亭文庫本）』・『堀川夜討』・『四国落』・『清重』・『高館』（二例）

(6) 「十文字」「くもで」「かくなわ」「八つ花形」型

御『弁慶物語（武蔵坊絵縁起）』（二例）

(7) 「くもで」型

御『鴉鷺合戦物語』（文禄三年写本）（二例）

(8) 「くもで」「かくなわ」型

御『弁慶物語（元和七年写本）』（二例）

(9) 「くもで」「かくなわ」「八つ花形」形

御『弁慶物語（武蔵坊絵縁起）』（二例）

(10) 「とんぼ返り」型

浄『源平布引瀧』・『平家女護嶋』（二例）

(11) 「水車」型

御『鴉鷺合戦物語』（寛永頃古活字本）（二例）

幸『烏帽子折（幸若直熊本）』（二例）

『信田』・『烏帽子折（霞亭文庫本）』・『堀川夜討』・『夜討曾我』（二例）

浄「義経千本桜」(一例)

また、合戦表現の形式別に見た、御伽草子(=御)、謡曲(=謡)、幸若舞曲(=幸)、浄瑠璃(=浄)における「奮戦動作」は、次の通りである(表1②)・(表2②)・(表3②)・(表4②)参照。

(1)「十文字」型

a 「太刀で敵を斬る動作」(集団型)として用いられるもの  
浄「傾城掛物揃」

b 「長刀で敵を斬る動作」(英雄型)として用いられるもの  
御「弁慶物語」(元和七年写本)・「じぞり弁慶」

c 「馬で敵を駆け破る動作」(集団型)として用いられるもの  
の

御「鴉鷲合戦物語」(寛永頃古活字本)

(2)「くもで」「十文字」型

「馬で敵を斬り回る動作」(英雄型)として用いられるもの

謡「兼平」

(3)「くもで」「かくなわ」「十文字」型

a 「太刀(長刀)で敵を斬る動作」(英雄型・集団型)として用いられるもの  
の

御「秋夜長物語」(英雄型)

謡「腹」(英雄型)

浄「ひらかな盛衰記」(英雄型)・「義経千本桜」(英雄型)・

「二谷敏重記」(集団型)

b 「馬で敵を斬り回る動作」(英雄型)として用いられるもの

の

浄「けいせい反魂香」

(4)「くもで」「輪違」「十文字」型

「馬で敵を斬り回る動作」(英雄型)として用いられるもの

の

浄「ひらかな盛衰記」

(5)「くもで」「かくなわ」「十文字」「八つ花形」型

「馬で敵を斬り回る動作」(英雄型)として用いられるもの

幸「景清」・「烏帽子折」(霞亭文庫本)・「堀川夜討」・「四国

落」・「清重」・「高館」

(6)「十文字」「くもで」「かくなわ」「八つ花形」型

「長刀で敵を斬る動作」(英雄型)として用いられるもの

御「弁慶物語」(武蔵坊絵縁起)

(7)「くもで」型

「馬で敵を駆け破る動作」(集団型)として用いられるもの

の

御「鴉鷺合戦物語」(文禄三年写本)

(8) 「くもで」「かくなわ」型

「太刀で敵を斬る動作」(英雄型)として用いられるもの

御「弁慶物語(元和七年写本)」

(9) 「くもで」「かくなわ」「八つ花形」形

「長刀で敵を斬る動作」(英雄型)として用いられるもの

御「弁慶物語」(武蔵坊絵縁起)」

(10) 「とんぼ返り」型

a 「太刀(長刀)で敵を斬る動作」(英雄型)として用いられるもの

浄「平家女護嶋」

b 「素早く後ろに引く動作」(英雄型)として用いられるもの

浄「源平布引瀧」

(11) 「水車」型

a 「長刀で敵を斬る(長刀を使う)動作」(英雄型)として

用いられるもの

御「鴉鷺合戦物語(寛永頃古活字本)」

幸「烏帽子折(寛享文庫本)」・「烏帽子折(幸若直熊本)」

「堀川夜討」

浄「義経千本桜」

b 「棒で敵を打つ動作」(英雄型)として用いられるもの

幸「信田」・「烏帽子折(幸若直熊本)」

c 「相撲を取る動作」(二騎打型)として用いられるもの

幸「夜討會我」

以上に掲げる〈表1①②〉・〈表2①②〉・〈表3①②〉・

〈表4①②〉が示すように、御伽草子、謡曲、幸若舞曲、浄瑠璃における合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」「八つ花形」「輪違」は、第一章・第三章で取り上げた軍記物語、戦記、雑史の表現に該当する。また、表現の使用される「奮戦動作」に注目したところ、幸若舞曲「夜討會我」の「水車」型、浄瑠璃「源平布引瀧」・「平家女護嶋」の「とんぼ返り」型に、これまでは異なった方法が取られていることに気付く。

まず、「奮戦動作」として用いられる「水車」型であるが、先に取り上げた軍記物語、戦記より、剣術・棒術の一つであることが分かっている。そこで、幸若舞曲に、相撲四十八手の一つ、「水車」が使用されていることで、江戸時代に「水車」型としての「奮戦動作」の多様性を確認することが出来る。

参考のため、ここに、相撲の技として用いられる「水車」型

の説明を挙げておく。

水車が廻るように相手の手をとって振り廻す型。【注一】

次に、浄瑠璃「源平布引漣」の「とんぼ返り」型について、前掲した説明を参考に、次のように比較する。

① 心得九郎助太郎吉を背中にしっかり鍵一本。……横田が諸脚殺竿なぐりにとんぼう返り。竹巻通さじとむしゃぶり付ば。まっかせ合点と向ふ突。

② 誘い太刀を打ってすばやく後に引き、相手がつけ込んで打ち掛けるとき、とび違つて刀を返しさまにこれを斬る方法。

①は、浄瑠璃「源平布引漣」に見られる「とんぼ返り」型であり、②は、序論で掲げた「日本国語大辞典」第十五卷（小学館一九七五年）による「とんぼ返り」の説明である。

ここで、①の「とんぼ返り」型は、②の説明に、そのまま当てはまらないことが分かる。そこで、浄瑠璃「源平布引漣」における「奮戦動作」と、『日本国語大辞典』における説明より、両者の該当する箇所を示すと次のようになる。

a ① 「横田が諸脚殺竿なぐりにとんぼう返り」

② 「誘い太刀を打ってすばやく後に引き」

b ① 「竹巻通さじとむしゃぶり付ば」

② 「相手がつけ込んで打ち掛けるとき」

c ① 「まっかせ合点と向ふ突」

② 「とび違つて刀を返しさまにこれを斬る」

ただし、①で使用される武器は鎌であり、太刀ではない。

つまり、江戸時代の浄瑠璃「源平布引漣」において、「とんぼ返り」型は、「鎌を使って戦う動作」全体ではなく、「素早く後に引く」という一動作として用いられていると言える。

また、「とんぼ返り」型には、江戸時代の浄瑠璃「平家女護嶋」のように、名称として用いられているものがある。まず、ここに、その用例を挙げてみる。

傳法院の今草駄天今毘沙門。鉢を取ってはならび名取りの。法師武者俱舎唯識維摩の學頭にて。智慧ことにすぐるれば。今文殊とも字せり。鎮守堂の鯛口因幡あのみし、和泉とら禪師。是等ははやわざ準の飛鳥の影にさきだつて。風を追っかけ嵐を追つてめ掃わり。石割り。岩切坊。發志院にはとんぼう返りの通明法師。欠くりの小聖夜又新發意。榎の木寺になた僧正元興寺に鎌僧都。

このように、「傳法院の今草駄天今毘沙門」は、「智慧ことにすぐる」から「今文殊」、「鎮守堂の鯛口因幡あのみし、和泉とら禪師」は、「風を追っかけ嵐を追つてめ掃わり。石割り」す

るから「石切坊」と呼ばれる。つまり、ここには、法師の優れた才能より名付けられた珍しい呼び名が列挙され、「發志院の通明法師」は、「とんぼ返り」に秀でた人物」と言える。

また、それぞれの法師特有の武器「鉾」「矢」「なた」「鎌」などから、「とんぼ返り」が、「岩切坊」の得意技に同様、太刀技であると考ええる。

以上、江戸時代の浄瑠璃『源平布引池』・『平家女護嶋』を参考に、「とんぼ返り」型使用の多様性を見た。

最後にもう一つ、前掲した浄瑠璃『傾城掛物揃』の合戦表現「くもでつるかけますかけわたし、十もんじ」について考えた。

『日本国語大辞典』第十四卷（小学館 一九七五年）によれば、「つるかけます」について、次のような説明がある。

つるかけます〔弦掛拵〕

木製の拵の一隅から一隅へ鉄製の棒を対角線にわたしたものの。京拵の一種で、江戸時代から明治時代にかけて広く用いられた。弦掛の拵。鉄判拵（かなばんます）。つるかけ。

つまり、「くもで」型の「蜘蛛の手のように、四方八方に太刀を振る動作」は、同じように蜘蛛の手に似た、対角線の状態を持つ「つるかけます」を連想させるものであった。そこで、

「くもでつるかけますかけわたし、十もんじ」が、「くもで」「十文字」型から技巧的に派生した表現であることは間違いない。

このように、江戸時代に見られる合戦表現「くもでつるかけますかけわたし、十もんじ」には、第三章で掲げた戦国時代成立の『上野國群馬郡箕輪軍記』の「くもで」「かくなわ」「十文字」「かげろう」「稲妻」「水の月」「水車」型と同様、技巧性が確認出来る。

考察の結果、合戦を題材とした御伽草子、謡曲、幸若舞曲、浄瑠璃の場面においては、「まくり切り」「撫切」「拝打」「車切」「袈裟切」など、多くの太刀（長刀）技登場と共に、合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」の技巧性が目立つ。また、合戦表現に対する「奮戦動作」の多様性も特徴的である。

つまり、御伽草子、謡曲、幸若舞曲、浄瑠璃が成立した室町時代から江戸時代にかけて、合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」は、著しく派生し、更に技巧性を持つ表現に変化したと言える。

注1 新日本古典文学大系『鐸の本』（岩波書店 一九九四年）



〈表1①〉御伽草子

秋夜長物語	十文字	くもで かくなわ 十文字	十文字 くもで かくなわ 八つ花形	くもで	くもで かくなわ	くもで かくなわ 八つ花形	水車
鴉鷺合戦物語・文禄三年写本	1	1		1			
鴉鷺合戦物語・寛永頃古活字本	1		1				1
弁慶物語・武蔵坊絵縁起	1				1	1	
弁慶物語・元和七年写本	1				1		
じぞり弁慶	1						

〈表1②〉

太刀で敵を斬る動作	十文字	くもで かくなわ 十文字	十文字 くもで かくなわ 八つ花形	くもで	くもで かくなわ	くもで かくなわ 八つ花形	水車
長刀で敵を斬る(長刀を使う)動作	弁元・じ	秋	弁室	鴉文	弁元	弁室	鴉寛
馬で敵を駆け破る動作	鴉寛						

(注) 「秋夜長物語」〓秋・「鴉鷺合戦物語(文禄三年写本)」〓鴉文・「鴉鷺合戦物語(寛永頃古活字本)」〓鴉寛・「弁慶物語(室町末期写)武蔵坊絵縁起」〓弁室・「弁慶物語(元和七年写本)」〓弁元・「じぞり弁慶」〓じ

〈表2①〉 謡曲

兼平	くもて 十文字	くもて かくこなわ 十文字
1		1

〈表3①〉 幸若舞曲

信田	くもて かくこなわ 十文字 八つ花形	水車
景清	1	
烏帽子折・霞亭文庫本	1	1
烏帽子折・幸若直熊本		2
堀川夜討	1	1
四国落	1	
清重	1	
高館	1	
夜討曾我		1

〈表2②〉

兼平	くもて 十文字	くもて かくこなわ 十文字
馬で敵を斬り回る動作		1
太刀で敵を斬る動作		

〈表3②〉

長刀で敵を斬る（長刀を使う）動作	くもて かくこなわ 十文字 八つ花形	水車
棒で敵を打つ動作		烏霞・烏幸・堀
馬で敵を斬り回る動作	景・烏霞・堀・ 四・清・高	信・烏幸
相撲を取る動作		夜

〔注〕「信田」〓「信」・「景清」〓「景」・「烏帽子折（霞亭文庫本）」〓「烏霞」・「烏帽子折（幸若直熊本）」〓「烏幸」・「堀川夜討」〓「堀」・「四国落」〓「四」・「清重」〓「清」・「高館」〓「高」・「夜討曾我」〓「夜」

〈表4①〉 浄瑠璃

けいせい反魂香	十文字	くもで かくなわ 十文字	くもで 輪違 十文字	とんぼ返り	水車
傾城掛物櫛	1	1	1		
ひらかな盛衰記		1			
義経千本桜		1			1
源平布引瀧				1	
平家女護嶋				1	
一谷嫩軍記		1			

〈表4②〉

太刀で敵を斬る動作	十文字	くもで かくなわ 十文字	くもで 輪違 十文字	とんぼ返り	水車
長刀で敵を斬る動作	傾	ひ・義・一		平	義
馬で敵を斬り回る動作		け	ひ	源	
素早く後に引く動作					

〔注〕 「けいせい反魂香」 〓 け・「傾城掛物櫛」 〓 傾・「ひらかな

盛衰記」 〓 ひ・「義経千本桜」 〓 義・「源平布引瀧」 〓 源・

「平家女護嶋」 〓 平・「一谷嫩軍記」 〓 一

## 結論

以上、軍記物語、戦記、雑史、御伽草子、謡曲、幸若舞曲、浄瑠璃における合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」と、その用いられる「奮戦動作」について見てきた。「平家物語」の合戦表現を基にした派生は、時代を経る度に、著しく、用いられる表現の「奮戦動作」にも変化がある。

そこで、各作品の成立（書写）時代に見る合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」、それぞれの形式と派生時期について考えていきたい。

まず、派生表現が登場する時期を、各時代の作品で確認し、更に、その時代に存在する合戦表現が、どのような「奮戦動作」として使用されているのか分類したものが〈表1〉である。

ここで、各時代における合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」の形式について見ていきたい（〈表1〉参照）。

① 鎌倉時代に、最も原形である「十文字」型と、そこから派生した「くもで」「十文字」型、「くもで」「かくなわ」

「十文字」「とんぼ返り」「水車」型、「水車」型が登場し、これらは、江戸時代にかけてずっと使用されている。

② 室町時代に登場する合戦表現には、この時代にしか使用されない「とんぼ返り」「水車」型、「十文字」「八つ花形」型、「くもで」「かくなわ」「八つ花形」型、「十文字」「くもで」「かくなわ」「八つ花形」型、「くもで」「かくなわ」「十文字」「かげろう」「稲妻」「水の月」「水車」型と、江戸時代にかけて使用される「くもで」「かくなわ」型、「くもで」「かくなわ」「十文字」型の二種類がある。

③ 室町時代にのみ存在する「十文字」「八つ花形」型、「くもで」「かくなわ」「八つ花形」型、「十文字」「くもで」「かくなわ」「八つ花形」型、「くもで」「かくなわ」「十文字」「かげろう」「稲妻」「水の月」「水車」型からは、「八つ花形」・「かげろう稲妻水の月」の登場が確認出来る。

④ 江戸時代になって初めて見られる「十文字」「巴の字」型、「くもで」「輪違」型、「くもで」「輪違」「十文字」型からは、「巴の字」・「輪違」の登場が確認出来る。

⑤ 「八つ花形」・「かげろう稲妻水の月」「巴の字」・「輪違」を用いた、一時代にしか存在しない合戦表現は、各時代の作品独自に生み出された表現方法であろう。

また、各時代の派生表現が用いられる。「奮戦動作」についても見ていきたい（〈表一〉参照）。

① 鎌倉時代に登場する合戦表現の「奮戦動作」は、大きく二つに分けることが出来る。一つは騎馬戦に取材した「馬で敵を駆け破る動作」、もう一つは、徒歩戦に取材した「太刀で敵を斬る（長刀を使う）動作」・「敵に走り向かう動作」である。

② 室町時代に見られる合戦表現には、「馬で敵を駆け破る（斬り回る）動作」（騎馬戦）よりも、「太刀で敵を斬る動作」・「長刀で敵を斬る（長刀を使う）動作」・「棒で敵を打つ動作」のように、徒歩戦に取材した「奮戦動作」が多い。

③ 江戸時代における合戦表現の「奮戦動作」は様々で、騎馬戦に取材した「馬で敵を駆け破る（斬り回る）動作」や「馬で敵に当たる動作」、徒歩戦に取材した「太刀で敵を斬る動作」・「長刀で敵を斬る（長刀を使う）動作」・「棒で敵を打つ動作」・「素早く後ろに引く動作」がある。また、「水車」型は、合戦以外に、「相撲を取る動作」としても用いられる。

④ 各時代の合戦表現は、ほぼ「形式一（一）動作」として存在する。しかし、鎌倉時代、「形式一（二）動作」

であった合戦表現「十文字」「水車」も、江戸時代には、「形式三（四）動作」として使用され、合戦表現に対する「奮戦動作」の多様性を確認することが出来る。

このように、各時代の作品における合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」は、形式とその用いられる「奮戦動作」が様々である。

各時代の作品には、「平家物語」の合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」を基に、多くの派生表現が登場する。中でも、中世から近世に及ぶ多様な戯曲形式、謡曲・舞曲・浄瑠璃において、「平家物語」は、一貫して、重要な素材源であった。【注一】

そこで、合戦表現「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」が使用される作品には、「平家物語」に原拠した謡曲「兼平」・「服」、幸若舞曲「景清」・「堀川夜討」、浄瑠璃「ひらかな盛衰記」・「源平布引瀧」・「平家女護嶋」・「一谷敏軍記」が確認出来る。

また、原拠が、「平家物語」でない幸若舞曲「信田」・「烏帽子折」・「四国落」・「清重」・「高館」・「夜討曾我」、浄瑠璃「けいせい反魂香」・「傾城掛物揃」・「義経千本桜」、御伽草子「秋夜長物語」・「鴉鷲合戦物語」・「弁慶物語」・「じぞり弁慶」、軍

記物語・戦記「保元物語」・「平治物語」・「應永記」・「應仁記」・  
「應仁別記」・「鎌倉大草紙」・「結城戰場物語」・「相州兵亂記」・  
「さくこおちのさうし」・「なかおちのさうし」・「上野國群馬  
郡箕輪軍記」・「宮樫記」・「荒山合戦記」・「太平記」・「曾我物語」・  
「大友記」・「雜史」・「伯耆之卷」・「豫章記」にも、「くもで」「か  
くなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」という合戦表現は使  
用され、合戦場面における「平家物語」の影響は大きい。

このように、「平家物語」の合戦表現「くもで」「かくなわ」  
「十文字」「とんぼ返り」「水車」は、各時代の作品における  
「合戦動作」表現として欠かすことが出来ない。

注1 市古貞次編「平家物語研究事典」(明治書院 一九七八年)

〈表1〉

鎌倉時代	室町時代	江戸時代
十文字	十文字	十文字
くもで・十文字	くもで・かくなわ・十文字	くもで・かくなわ・八つ花形
くもで・かくなわ・十文字・とんぼ返り・水車	くもで・かくなわ・十文字・とんぼ返り・水車	くもで・かくなわ・八つ花形
水車	くもで・かくなわ	くもで・かくなわ・十文字
くもで・かくなわ	くもで・かくなわ・十文字	とんぼ返り・水車
くもで・かくなわ・十文字	十文字・八つ花形	十文字・くもで・かくなわ・八つ花形
くもで・かくなわ・八つ花形	十文字・くもで・かくなわ・八つ花形	くもで・かくなわ・十文字・かげろう・稲妻・水の月・水車
くもで	くもで	くもで
とんぼ返り	とんぼ返り	とんぼ返り
十文字・巴の字	十文字・巴の字	くもで・かくなわ・十文字・八つ花形
くもで・かくなわ・十文字・八つ花形	くもで・かくなわ	くもで・輪違
鎌倉時代	室町時代	江戸時代
D	D	D
D	D	D
A	A	A
B	A B C	A B C
	A	A
	A D	A (B) D
B	B	
B	B	
B	B	A (B) H
D	D	D
	D	D
	D	D
	D	D
	D	D
	E	D
	E	D
D	E	D
D	D	D
D	D	D

(注)

「太刀で敵を斬る動作」|| A・「長刀で敵を斬る(長刀を使う)動作」|| B・「棒で敵を打つ動作」|| C・「馬で敵を駆け破る(斬り回る)動作」|| D・「馬で敵に当たる動作」|| E・「敵に走り向かう動作」|| F・「相撲を取る動作」|| G・「素早く後ろに引く動作」|| H

調査文献

- 〔屋代本〕佐藤謙三・春日宣編『屋代本平家物語』（桜楓社 一九七二年）
- 〔百二十句本〕高橋貞一『平家物語百二十句本』（思文閣 一九七三年）
- 〔平松家本〕山内潤三・木村晟『平松家旧藏本平家物語』（古典刊行会 一九六五年）
- 〔寛一本〕高木市之助・小澤正夫・渥美かをる・金田一春彦『平家物語』日本古典文学大系上・下（岩波書店 一九五九・一九六〇年）
- 〔寛一別本〕市古貞次『平家物語』日本古典文学全集一・二（小学館 一九九三年）
- 〔葉子上行本〕富倉徳次郎『平家物語』日本古典全書上・中（朝日新聞社 一九六三年）
- 〔下村時房刊本〕與謝野寛・正宗敦夫・與謝野晶子編『平家物語』日本古典全集上・下（日本古典全集刊行会 一九二六年）
- 〔流布本〕梶原正昭『平家物語』（桜楓社 一九七九年）
- 〔平家正節〕平家正節刊行会編『平家正節』上・下（大学堂書店 一九七四年）
- 〔八坂本〕国民文庫刊行会編『平家物語附承久記』（国民文庫刊行会 一九六九年）
- 〔源平闘争録〕山下宏明編『源平闘争録と研究』（未刊国文資料刊行会 一九六三年）
- 〔四部合戦扶本〕高山利弘編著『訓読四部合戦扶本平家物語』（有精堂出版 一九九五年）
- 〔延慶本〕北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語』本文篇上・下（勉誠社 一九九〇年）
- 〔長門本〕岡山大学池田文庫等刊行会編『岡山大学本平家物語』二・四（福武書店 一九七六・一九七七年）
- 〔源平盛衰記〕渥美かをる『源平盛衰記』古典資料類従二・三・五（勉誠社 一九七八年）
- 金田一春彦・清水功・近藤政美編『平家物語総索引』（学習研究社 一九七三年）
- 〔保元物語・平治物語〕永積安明・島田勇雄『保元物語平治物語』日本古典文学大系（岩波書店 一九七八年）
- 坂詰力治・見野久幸編『平治物語総索引』（武蔵野書院 一九七九年）
- 〔曾我物語〕市古貞次・大島建彦『曾我物語』日本古典文学大系（岩波書店 一九七八年）
- 大野晋・武藤宏子編『曾我物語総索引』（至文堂 一九七九年）
- 〔太平記〕後藤丹治・釜田喜三郎『太平記』日本古典文学大系（岩波書店 一九七七年）
- 〔保元物語平治物語承久記〕新日本古典文学大系（岩波書店 一九九四年）
- 〔義経記〕日本古典文学大系（岩波書店 一九七七年）
- 〔伯耆之巻・應永記・應仁記・應仁別記・鎌倉大草紙・結城戰場物語・相州兵亂記・さゝこおちのさうし・なかおちのさうし・上野國群馬郡資輪軍記・富樫記・荒山合戦記・豫章記・大友記〕



- 塙保己一編『群書類従』二〇・二一合戦部（統群書類従完成会  
 一九八三・一九八四年）  
 統群書類従完成会編『群書解題』一三（統群書類従完成会  
 一九六〇年）  
 〔秋夜長物語〕市古貞次「御伽草子」日本古典文学大系（岩波書  
 店 一九七七年）  
 柳原邦彦・藤掛和美・塚原清編『御伽草子總索引』（笠間書院  
 一九八八年）  
 〔鴉鷺合戦物語（文禄三年写本）・弁慶物語（元和七年写本）・  
 じぞり弁慶〕横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』二・六  
 （角川書店 一九七五・一九九二年）  
 〔鴉鷺合戦物語（寛永頃古活字本）・弁慶物語（武藏坊絵縁起）〕  
 市古貞次・秋山治・沢井耐三・田嶋一夫「室町物語集」上・下  
 新日本古典文学大系（岩波書店 一九八九・一九九二年）  
 〔兼平・釼〕田中允「謡曲集」日本古典全書上（朝日新聞社 一  
 九六五年）  
 野上豊一郎「解註・謡曲全集」六（中央公論社 一九三六年）  
 横道萬里雄・表章「謡曲集」日本古典文学大系下（岩波書店  
 一九六三年）  
 〔信田・景清・烏帽子折（葎亭文庫本）・堀川夜討・四国落・清  
 重・高館・夜討曾我〕麻原美子・北原保雄「舞の本」新日本古  
 典文学大系（岩波書店 一九九四年）  
 〔烏帽子折（幸若直熊本）〕吾郷寅之進・福田晃編「幸若舞曲研究」  
 七（三弥井書店 一九九二年）  
 〔けいせい反魂香・平家女護嶋〕守隨憲治・大久保忠國「近松淨
- 瑠璃集』日本古典文学大系下（岩波書店 一九七八年）  
 〔傾城掛物揃〕藤井乙男「近松全集」九（朝日新聞社 一九二七  
 年）  
 〔ひらかな盛衰記・源平布引讎〕「浄瑠璃集」日本古典文学大系上・  
 下（岩波書店 一九七七・一九七八年）  
 〔義経千本桜〕祐田善雄「文樂浄瑠璃集」日本古典文学大系（岩  
 波書店 一九七八年）、角田一郎・内山美樹子「竹田出雲並木宗  
 輔浄瑠璃集」新日本古典文学大系（岩波書店 一九九二年）  
 〔一谷嫩軍記〕日本名著全集刊行会編「浄瑠璃名作集」上・下  
 （日本名著全集刊行会 一九二七・一九二九年）